九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インドの子どもの労働に見る階層化のイデオロギー：首都デリーを中心に

針塚，瑞樹
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/2338968

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.49-55, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

インドの子どもの労働に見る階層化のイデオロギー
―首都デリーを中心に―

針塚　瑞樹
（九州大学大学院）

Ⅰ．初めに

開発途上国といわれる国々において、子どもが働いている姿は当たり前の光景である。しかし、UNICEF や ILO（国際労働機関）などの国際機関を中心として、子どもの労働は教育を受ける権利の剝奪や、心身の発達の阻害要因として語られ、国際社会が取り組むべき命題として掲げられている［ユニセフ 1997；ILO 1998］。

社会問題として認識されている事象が、現地の文脈においてどのようにとらえられているのかを検討することは、実践的な活動にしろ、研究という形態にしろ、異文化の事象に関わりをもつ場合には必要な作業である。言説のレベルでは、社会問題として語られる子どもの労働は、働いている子ども達や彼・彼女らに日常的に関わる人々にどのように理解されているのであろうか。労働が子どもにとって害悪であると判断する際に、基準として用いられる「搾取」という言葉でさえも、何をもって搾取とするかの判断は、見る人の主観によるため［Fyfe 1988；ナーディネリ 1998］、子ども達が置かれている状況や、子どもの労働が語られる場によって、現地での理解がそれとは異なっていることを疑う必要がある。

本稿では、社会問題としてネガティブに語られる傾向にある子どもの労働を、インドの首都デリーで働き、路上生活をする子ども達と、彼・彼女らを支援する NGO の活動の事例を通して、現地の人々が子ども達の状況をどのように考え、実践的な介入を行っているのか考察する。そして、ある事象が社会問題として構築されるプロセスや、第四世界への介入といった本セッションのテーマにつなげていくことを試みる。

Ⅱ．子どもの労働の一般的な理解

Ⅱ-1　子どもの労働を見る視点

子どもが働くことは、家の仕事の手伝いや職業訓練とみなされ、子どもの成長にとって良い一面があることは認められており、問題視されている子どもの労働とは、子どもにとってふさわしくないものであるのは確かである。UNICEF も「子どものためになる労働と容認できない労働を区別し、児童労働の多くが両者の間の灰色の領域にあることを認めることが重要である」としている［ユニセフ 1997］。子どもの労働に対する評価を検討しなければならない理由はここにある。つまり、何が子どもにとってためになる労働で何が容認できない労働であるかという判断は、子ども達が生きている状況によって異なっている。この「灰色の領域」にある子どもの労働は、見る者によって白とも黒とも判断される余地がある。

子どもの労働を自明の「子ども時代」を奪うものとする考え方は「子ども時代」が誰に対しても平等に存在するわけではない社会では現実には受け入れられていない。「灰色の領域」に留意し、子どもが生きている状況に応じた策を模索することが重要である。

Ⅱ-2　子どもの労働の定義

本稿で子どもの労働とは、子どもが体を使って働くことを指す。問題とされる子どもの労働は「子供の健康と成長に有害な労働」な児童労働とよばれ、低年齢、心身への危険性、長時間労働、虐待、過剰な責任など搾取的な性格が問われている［ILO 1998；Fyfe 1989］。

世界で児童労働に従事する子どもの数は、1996年11月の ILO の推計によると、5～14歳では、少なくても 2 億5,000万人である［ILO 1998］。児童労働は、今日では世界的な規模で議論されるようになったが、最近まで開発途上国につきものの現象であると考えられてきた［初岡 1997；Fyfe 1989］。この問題に対する国際的な取り組みの上で大きな転機となったのは、1989年に国連総会で採択された子どもの権利条約である。この条約により、児童労働に関する法の整備と撤廃への取り組

みは大きく促進された［Alaimo 2002；初岡 1997］。

子どもの権利の普及による子ども達の生活の変化について、Sucheper-Hughes と Carolyn は、次のように指摘する。近代初期の子ども達は労働によって家政に貢献し、社会的価値が認められていたが、権利によって「子ども性」を獲得した今日の子ども達は、経済的価値を生み出すことなく、成人中心の消費社会の中で疎外されている。子どもの権利の下では、子どもは自由時間もなく勉強させられ、成人病を患うようになっており、大人と同じ役割を負わされている［Sucheper-Hughes and Carolyn 1998］。

この指摘は、働く子ども達が「子ども時代」を失っているという語りに対して、疑問を投じるものである。働く子ども達は経済的に貢献していたが、働くことのなくなった子ども達は、将来働いて社会に参加するための予備軍となり「子ども時代」を得ている。働く子ども達にとって「子ども時代」は、大人の保護の下で社会参加を始める時期であった。しかし、働かない子ども達は、社会参加ための予備期間を生きることで、「子どもであること」を要求される。働く子ども達が「子ども時代」を有していない一方で、働かない子ども達は、社会参加を限定されているともいえる。

II-3　ストリートチルドレンの定義

ストリートチルドレンの多くは都市の路上で生活しており、都市への人口の流出という最近の社会現象を象徴している。後ほど本稿では、働く子ども達の事例としてストリートチルドレンを取り上げるため、その定義を整理しておく。

1980年代頃までのストリートチルドレンの定義には、子どもがストリートで過ごす時間、生活の糧を得る場、大人からの保護の欠如という三要因が含まれていた。しかし、家庭、家族、保護や「責任のある大人」が意味するものが文化によって異なり、ストリートチルドレンというラベリングが、差別やレッテル張りにつながり、さらに、それ以外の子ども達への無関心を引き起こすという問題が指摘され始めている［Panter-Brick 2002］。

ストリートチルドレンの中には、家族と接触をもたず、一人で独立して生活している子ども達もいる。しかし、こうした場合でも、子どもは仕事を通して仲間との関係を築いたり、自分の力で生活をしていることへの自信を獲得しているといわれる。初岡は、働く子ども達が、労働が自分自身や家族を支えていることで、自信と責任感などの積極的な感情を持つとして、子どもの労働の現実と多面性、底の深さを指摘している［初岡 1997］。

III．インドにおける子どもの労働

III-1　インドにおける子どもの労働に対する取り組み

2000年インドでは首都デリーにおいて、UNESCO の主催で「インドにおけるストリートチルドレンと働く子ども達に関する教育の状況分析」というテーマで会議が開催された。この会議には国連職員、インド政府関係者、研究者、NGO 職員、教育関係者などが参加し、インド国内で 6 ～14歳のすべての子ども達に2015年までに教育を普及するために、ストリートチルドレンと働く子ども達の問題の解決を目指して行動することが確認された。［UNESCO 2000］。

法的なレベルでは、インド国会は1986年には児童労働法を制定し、14歳以下の子どもが、過酷な重労働に従事することを禁じている。しかし、法律の実行力について、Jain は最低賃金に関する法律が制定されていないことや、子ども達の多くが従事しているインフォーマルセクターが、そもそも法の適用を回避していること、働く子どもやその親たちが法律の存在自体を知らないことを指摘している。また、法律が実行力を欠いた状態においては、子ども達を搾取的な雇用から守る権利や条約は神話と化しており、その背景にはインド社会における子どもの労働の問題への社会的関心の低さがあること、そのためこの問題の解決には長い時間がかかるという［Jain 1994］。

III-2　NGO による子ども達への支援活動

III-2-1　NGO の活動理念としての「子どもの権利」の概念

インドには、貧しい子ども達を支援したり、児童労働の問題の解決を目指す NGO が約700あると言われる。そのうち300あまりの NGO が集まって、1992年「児童労働反対キャンペーン」というネットワーク組織を形成し、子どもの権利について人々の関心を高め、啓発することなどを目的と

して活動を行っている［国際子ども権利センター 1999］。

NGOごとに実践は多様であるが、活動理念には子どもの権利の考え方が含まれている。1988年にデリーに設立されたNGO 'Butterflies' は、「子ども自身の参加」を重視し、1993年に裁判に勝訴し、「子ども労働組合」を結成した［初岡 1997］。NGO 'Global March' は、1998年最悪の形態の児童労働の即刻廃止の条約制定を目指すILO総会の際に、世界各地の労働組合とNGOが参加した児童労働に反対する行進をきっかけに発足し、デリーに本部をおく。'Global March' の活動理念は、「全ての子どもの権利を保護し、推進するために世界的努力を動員すること」である［Global March］。

Ⅲ-2-2　SBTにおける子ども達への支援活動

ここでは、筆者が現地調査を行ったNGO 'Saalam Balaak Trust' のストリートチルドレンへの生活・教育支援活動について報告する。この報告は、デリーのストリートチルドレンの生活と、彼・彼女らに対する人々の意識に関して、支援活動の参与観察と、NGOの職員とその支援対象者であるストリートチルドレンに対するインタビューにより得られた知見による。

① NGO 'Saalam Balaak Trust' の概要

Saalam Balaak Trustは1988年にデリーのニューデリー駅近くに設立されたNGOである。活動の目的・理念は、ストリートチルドレンと働く子ども達が社会のメインストリームで生きる環境を創ることである。SBTは、3つの子ども達との接触場所（コンタクトポイント）、4つの生活施設（シェルターホーム）、1つの教育提供施設（アウトリーチセンター）での活動を通して、ストリートチルドレンに対するケアと保護を提供している。活動の資金は、インド政府、欧米のNGO、国内外の個人による寄付金による。以下では、筆者が調査を行ったコンタクトポイントの一つ、General Reserve Police Center（以下GRP）での活動について報告する。

② GRPにおけるストリートチルドレンに対する支援活動

GRPで活動する常勤のスタッフは男性3名である。GRPはニューデリー駅構内の警察署にあるトイレの前のスペースを利用して活動を行っている。多くのストリートチルドレンが駅構内あるいは駅の周辺で寝泊まりしており、同意をした子ども達をまずコンタクトポイントへと連れていき、名前や出身地、家族構成や身体的特徴を記録する。GRPのスタッフは毎日子ども達の生活状況を調べる際に、登録された子どもに対しては、困ったことや、体調について質問し、新しくきた子どもには、SBTの存在を知らせ支援について説明する。

GRPの活動時間は、月曜から金曜までの午前10時半から午後2時までである。この時間にGRPに来た子ども達は、警察署のトイレで体を洗ったり、けがの応急手当てを受けたり、必要な場合は病院に行く。その他の子ども達は通常は、読み書きの練習をしたり、絵を描いたりして時間を過ごす。週1回読み書きを教えるSBTの職員が子ども達の学習の指導を行うが、通常、子ども達は好きなように自習をしている。子ども達は好きな時に来るため、同じ子どもが毎日来るというわけではない。新しい映画が公開される日には、子ども達が映画を見に行くので出席率は低いという。

一日平均して10〜20名位の子ども達がGRPに来ている。子ども達の年齢は5歳位から20歳位までと様々である。性別は男子の方が圧倒的に多い。子ども達の多くは、他州から電車に乗って家を出てきている。しばらくすると同じような子どもをまねたり、他の子どもから紹介されてゴミ拾い、荷物運び、飲食店の店員などをして働くようになる。

Ⅲ-3　ストリートチルドレンの生活

以下は、SBTで支援を受けた子どもに対して行った、ストリートチルドレンになる前後の生活に関するインタビューの際の語りである。

・ストリートチルドレンになる前の生活

〈少年D　15歳〉

出身地：ビハール州

父親の職業：衣服を売る店で働いている。

家族構成：父、母、兄、本人、弟、妹

家を出た時期：8年前、7歳のとき。

家を出た理由：家の雰囲気が嫌いで、家にいるのが嫌だから。

〈少年V　14歳〉

出身地：ネパール

父親の職業：無職

家族構成：父、母、姉、本人、弟、おじ、おば
家を出た時期：5年前、9歳のとき。
家を出た理由：父親の飲酒による暴力。

・ストリートチルドレンになってからの生活

〈少年D〉

駅で寝泊まりしていた。その時の生活はひどかったから、思い出すといつも泣いてしまう。仕事はゴミ拾いをしていた。ドラッグをしていた。ドラッグをしているときはひとりぼっちではなかったし、家族を思い出さなくてすんだ。ドラッグをしすぎて病気になり、歩けなくなったとき、誰かが病院に連れて行ってくれた。それまでは、病院に行けることを知らなかった。それが、きっかけで、SBTに来るようになった。家族が恋しいけれど、家に戻ってもまた逃げたくなるから家に戻る必要はない。今は、SBTにいて、勉強して将来はソーシャルワーカーになりたい。

〈少年V〉

パハールガンジのティーショップで働いていた。その頃は嫌な毎日だった。ティーショップでは皿洗いの仕事をしていた。店のオーナーの態度が悪く、きちんと眠る場所もなかった。いつも何かミスをすると給料が減らされた。今もその店の前を通ると、怒りを感じるし、思い出すと泣いてしまう。家族は恋しいが、今は故郷には帰りたくない。何年後かに帰りたい。家族は自分がここにいることは知らない。

Ⅲ-4　ストリートチルドレンという社会問題

Ⅲ-4-1　SBTの職員の活動理念

SBTのストリートチルドレンに対する活動から、こういった子ども達が多く存在し、入浴や医療といった基本的な生活上の支援や、種々の危険から身を守ることを必要としていることが分かる。子ども達の語りからも、彼・彼女らが生活の中で、助けを必要とする場合があることがうかがえる。SBTの職員は、子ども達を支援する活動の理念として、次のように語っている。

・子どもには教育、自由、問題を訴える権利がある。子どもは普通自分の権利について知らないため、権利について学んだ子どもが他の子どもに権利について教えることで、権利という考え方を共有している。(男性職員M)

・子どもは勉強したり、お金を稼いだり、自分の人生を選択することができる。「子どもの権利」とは、自分のライフスタイルを選べることである。(女性職員S)

・「子どもの権利」とは、「子どもの権利条約」で採択された考え方である。子どもは自分で自分の生き方を決めることができるが、何歳から自分の意思を明確に表現できるかは子ども一人ひとりによって違うため、一律に決めることはできない。(男性職員D)

以上の語りは、SBTの職員が子どもの権利の考え方を共有して活動を行っていることを示している。しかし、全ての子どもを保護の対象とする子どもの権利という考え方と、デリーでは日常の光景であるストリートチルドレンの状況とは相容れないものである。

Ⅲ-4-2　ストリートチルドレンに対する一般的理解

ストリートチルドレンが、様々な理由から家出をしてデリーに出てくるのは、都会に行って何とか自分の力で生活できることを知っているからである。日常的にストリートチルドレンと接しているSBTの職員やその他のNGO職員は、社会の中でストリートチルドレンの生きる状況をどのように考えているのであろうか。以下は、彼・彼女らのストリートチルドレンに対する一般の人々の理解についての語りである。

・ストリートチルドレンは汚い、盗みをする子どもとして悪く思われている。(SBT男性職員M)

・社会活動をしている人や研究者などストリートチルドレンに理解のある人は別だが、一般の人は彼・彼女らを汚いと考えている。(SBT男性職員D)

・一般の人々は権利という考え方そのものを知らない。ストリートチルドレンは政府の病院に行っても「汚い」という理由で診療を拒否される。(NGO 'D' 男性職員T)

ストリートチルドレンは一般的に権利を認められていない存在であるというのが彼らに共通した理解である。特に、Tの発言は、全ての個人が平等に有している権利の考え方が、社会の中に浸透していない可能性も示している。全ての子ども達が平等に基本的な生活を保障され、子ども時代を送るという子どもの権利の概念と、デリーのスト

リートチルドレンの状況とは異なっている。子ども達の状況は、子ども達の置かれた社会的に不利な条件の結果や保障されるべき権利の欠如以上に、子ども自身の属性としてとらえられている。

Ⅲ-5　働く子ども達の生きる現実

以上見てきたようなストリートチルドレンの生活は、インドの全ての子ども達の生活ではない。インドでは、受験競争の加熱が社会問題として指摘されている。インドの一流大学のキャンパスでは、10歳に満たない子どもが建築中の校舎の工事現場で働いており、学生が集うカフェで給仕をしているのは同じく幼い子どもである。

このような状況の中で働き、生活する子ども達について、社会活動家らは権利の剝奪を問題視するが、同時に彼・彼女らは子ども達の知恵やたくましさも指摘しているのである。

・働く子ども達は、自力で生きる強さをもっている。彼（路上生活の14歳の少年）はとても賢い。警察官と上手く関係をもち、小さな仕事をもらい稼いでいる。(SBT 男性職員D)

働く子ども達の教育や生活の問題を認識し、権利の保障を理念として活動する SBT の職員は、子ども達の状況が社会の中で問題とみなされる以上に容認されているという現実と、こういった子ども達の日常における強さと苦難を理解し、喜びや悩みを共有しながら、子ども一人ひとりの多様な生き方を支援しているのである。

Ⅳ．子どもの労働にみるインド社会

Ⅳ-1　階層化社会における子ども達

以上のようなインドにおける異なる子ども時代の背景には、社会階層による格差が考えられる。インドにおいて社会階層とは何を意味するのであろうか。インド社会の階層化に関する回答は以下のようなものであった。

・インドには Upper、Middle、Lower の 3 つの階層があるが、経済的な地位に基づくものでカーストとは関係がない。(NGO 男性職員N)
・私のようなミドルクラスの女性は、結婚前は父親に、結婚後は夫に従うのが普通。カーストが高くても貧しいかもしれないし、その逆もありうる。(SBT 女性職員S)
・カーストは都市では消えつつあるが、高カーストでハイステータスの人は、カーストを守りたいし、低カーストの人々に権利を与えたくない。(SBT 男性職員D)

以上の発言に共通しているのは、インドに社会階層があるという理解と、今でもカーストが人々の規範として機能していることの認識である。しかし階層といった場合は経済的格差に基づいたもので、カーストと必ずしも一致していない。カーストが職業集団、婚姻関係を形成していたことから、今でも社会的・経済的な地位を獲得するためのネットワークとして機能しており、このことが経済的階層とカーストとの関係を複雑にしていることが窺える。ストリートチルドレンの現状は、階層化された社会の中で容認されており、全ての子ども達が等しく機会をもつとする権利の概念は、インド社会には浸透していない。

SBT の活動においてストリートチルドレンは、支援を受けるかどうか、さらには路上生活をやめて施設で全面的に支援を受けるか、あるいは自分で働きながら部分的に支援を受けるのかを選択できる。近代社会において教育を受ける権利が子どもに与えられ、子どもが機会をもちながらそれを活用しないことが能力の欠如とみなされてしまうイリッチが指摘したような学校化された状況は、ここではみられない。むしろ SBT の活動において子ども達は、通常、権利を得ると同時に失うことになる、生き方の選択が許されているのである。子どもそれぞれの選択に沿った支援という形で、ストリートチルドレンとしての子どもの生き方は容認されている。彼・彼女らは、メインストリームでの生活の機会が与えられた場合でも、そうした生き方が結局は唯一の選択肢となる社会の学校化という価値へと一元化されることなく、働くことを容認されているのである。

Ⅳ-2　インド社会における階層化のイデオロギー

デュモンによれば、経済的・社会的な階層が宗教的なイデオロギーに包括されているのがインド社会の構造である［デュモン 2000］。この場合の宗教とは、インド人のおよそ 8 割が信仰しているヒンディズムであるが、ヒンディズムは宗教というよりも、生活全般にわたりインド人の行為規範となる生活様式と考えられている［中島 2002］。ヒンディズムにおいて重要なのは、カルマと輪廻の考え方である。カルマとは、人々が自由意思に

よって良い行いをすれば果報を受けることができるというものである。人は前世の行いにより、現世でどのカーストに生まれるのかが決定されるため、生まれたときから現世の自分の能力や努力とは別の運命に拘束されるのである。

インドの宗教的な概念やカースト制度と教育制度との関係について、Jaiswal は次のように述べている。インド人の社会秩序のとらえ方の信念においては、上位層と下位層の社会的役割や、社会階層間の格差維持のための教育の役割の尊重、貧困層への過度で不適切な教育が既存の社会制度を崩壊させることの憂慮がある。これらの信念は、宗教的な概念やインドの階層的なカースト制度の根本にある前提と密接に結びついている[Jaiswal 2000]。

Gupta はインド社会では宗教的なイデオロギーが支配的であるとするデュモンのカースト理解を基本的に認めながらも、低カーストの人々が自分たちを不浄と見る高カーストの人々の考えを拒否することから、一般的な浄・不浄観念に沿ったカースト理解が高カーストの人々による一つの見方に過ぎないことを強調するが、この場合でも低カーストの人々が問題視するのは階層化という枠組みの中における自らの位置づけであり、枠組み自体を疑うことはないことから、近年でもカーストアイデンティティが非常に強固なものであるという。人の地位はその人自身のカルマにより決定するというヒンディズムの教えを信じる高カーストの人々にとって、現世での特典は前世での良い行為への報酬であるため、それを不当な特権と感じる理由はないのである[Gupta 2000]。インドのストリートチルドレンの状況と、社会の階層化とそれを支えるヒンディズムにおける不平等を容認する考え方との関係を認めることはできるのではないだろうか。

SBT の活動は、学校に通い、施設の規則に従うという社会のメインストリームでの生活を選ばない、もしくは選べない子ども達に対しても、彼・彼女らの現状に沿った形での教育・生活支援を提供しながら、子ども達が困ったときに頼ることのできる場として重要な位置を占めている。そこでは、子ども一人ひとりの背景を考慮し、全ての子どもに対して一律な平等な機会という名の下に、個人の能力や努力という自己責任を課してしまうことを回避する余地がある。こういった実践は、子どもの労働を否定し困窮状態を早急に解決する方途とは異なるが、子ども達の現実に調和しそれぞれの生まれや生き方を認め、社会的な価値が一元化されない、学校化されない社会を示唆しているともいえる。SBT ではストリートチルドレンの現状を決して肯定しているわけではない。しかし、子ども達の背景を理解し長期的な視点を伴う実践によって、幅広い子ども達に居場所を開き、それが大きな支えとなっているのである。

V．終わりに

インドでは、働く子ども達を「汚い」「盗みをする」とみなし、社会の害悪とする理解がある。しかし、彼・彼女らを支援する NGO は、働く子ども達には権利が与えられておらず、子ども達にとって労働が害悪であるという。ある事象に対する社会問題としての認識は、「他人の状況を自分に置き換えて考えること」が出発点となっている。社会問題とは最初から問題であるのではなく、何らかの解釈を経て構築されているといえる。

社会活動家や研究者が介入する場合、一括りにされる問題が共通した要因をもちながらもそれぞれ異なっていることに留意しなければならない。こういった形での介入は、対話的になされる場合であっても、人と人との関係における権力に無縁ではありえない。しかし、その過程において、両者は相互にインパクトを受け合っている。介入者が透明な第三者としての立場にあり得ない以上、そうした権力関係に意識的で慎重な態度を保持する限りにおいて、一方にのみ変化をもたらす状況というのはありえず、対話は介入を行っている者に対しても変化を促す。そのような場合にのみ、限りなく共通理解に近づいた形での解決を模索し、両者が問題とみなした状況を変革する可能性が生じるのではないだろうか。

参考文献

ILO　1998『STOP THE CHILD LABOUR』ILO 東京支局。

イリッチ、イヴァン　1966[1977]『脱学校の社会』（東洋、小沢周三訳）東京創元社。

国際子ども権利センター　1999『社会を変える子どもたち』国際子ども権利センター。

デュモン、ルイ　2001『ホモ・ヒエラルキクス　カースト体系とその意味』(田中雅一、渡辺公三訳)みすず書房。

ナーディネリ、クラーク　1998[1990]『子どもたちと産業革命』(森本真美訳) 平凡社。

中島岳志　2002『ヒンドゥーナショナリズム　印パ緊張の背景』中央公論新社。

初岡昌一郎　1998[1997]『児童労働　廃絶に取り組む国際社会』日本評論社。

宮元啓一　1994「第2章　インドにおける輪廻と差別」『カースト制度と被差別民　第1巻　歴史・思想・構造』明石書店。

ユニセフ　1997　『世界子供白書』ユニセフ。

Alaimo, Kathleen 2002 *Children as Equals* Maryland: University Press of America.

Fyfe, Alec 1988 *Child Labor* Cambridge: Polity Press.

Global March Against Child Labour booklet.

Gupta, Dipankar 2000 *Interrogating Caste: Understanding Hierarchy and Difference in Indian Society* Kolkata: Penguin Books India

Jain, Mahaveer 1994 *Child Labor in India* Noida: National Labour Institute.

Jaiswal, Prauchi 2000 *Child Labour* Delhi: Shipra Publication.

Panter-Brick, Catherine 2002 "Street Children, Human Rights, and Public Health: A Critique and Future Directions" *Annual Review of Anthropology* 31.

Salaam Baalak Trust 2003 *Annual Report April 2002 -March 2003* New Delhi: Salaam Baalak Trust.

Scheper-Hughes, N. and Sargent Carolyn 1998 *Small Wars: The Cultural Politics of Childhood* California: University of California Press.

UNESCO 2000 *Research Report on A Situational Analysis of Education for Street and Working* Children in India New Delhi: UNESCO -New Delhi.